二十五歳

1920・2・26

全文

恋病（オンラブシック）

（四）

然しながら如上を以てのみ恋病を断じ去るは余りに上辷りの論である、俺はモ一段深い鉱脈を探らねばならぬ、真の意味の恋病は分別のあると無きと箱入娘なると否とを問わぬ、そしてそれは超私有財産的である、神に対する信仰と選ばぬ貴さを持つ、この意味の恋病は昔から減りも増しもしないであろう、故に現代に於ける恋病こそは珍重すべきである、これこそ真個の恋の表徴であるから、若し戦争の神様、憲政の神様、芝居の神様の如く恋愛の神様を許すならば現代に恋病を経験した人こそは夫れである、（少々断って置かねばならぬ、落語家の項以下に恋病とは世間の所謂恋病のことを指す）、

君よ、俺は今単的に実例を提供しよう、

Rは俺の妻である、妻は俺の為に恋病をした、これを告白することは俺にとって恥曝しであると同時に妻にとっては誇

初出・底本　伊勢新聞　二月二十六日号／大正九年　伊勢新聞社　＊貼雑年譜に収録。執筆者名義は平井太郎。「伊勢新聞大正九年二月二十三日ヨリ」「結婚後間モナク伊勢新聞ニ送リ文芸欄ニ連載サレタモノ。文中ノRハ隆子ノ「ト」」との註記がある。新字体、現代仮名遣いに改めた

以下に恋病　「以下の恋病」か。

りである、これを悪意に解釈すれば、おのろけである、然しおのろけの積りでいゝ気になる程俺は馬鹿でない、おのろけの恥しさを知った男のおのろけに忍苦と断行の勇気を要する、俺は少くも流行の告白小説が恥曝しに「小説」の鍍金をして居るのに比べれば正直だと信ずる、

Rは島の女教師であった、そして島の女教師である、ある日男がヒョッコリ学校へ遣って来た、そして生徒と父兄の前で田舎人の胆の狭さを攻撃した、男はRの頭のよさを野蛮人の様な純粋さとに淡き恋を抱いて去った、Rは男の態度から心の聰明さを推し計りて刹那の恋心を享けた、

二人の間に文通が始まった、そして二人の恋は濃くなった然し相逢うべく二人は余りに恥じ合っていた、ある日男は彼の友に一夫一婦主義より来れる独身主義を告白したそして男は世間こそ知らねCommerce sexualこそなけれ、処女の心を傷けたことを恥じた、けれどもRの恋は真剣であった、彼の女は信じて居た、熱情の勝利に一縷の望みをつないで居た、待つ朝も、待つ夜も男の便りはなくて、書いては破り、破っては書く恋文の文殻のみうず高くなって行った、男は彼の信念を築かんとして遠くRを後にして去った、Rは其れでも信じていた、男の自分に帰ることを信じていた、

果敢なき朝夕が五度の月を算えた、男の消息は分らなかったRはそれでも信じていた、君よ、Rは女教師であったこと

おのろけに忍苦　「おのろけは忍苦」か。

頭のよさを　「頭のよさと」か。

Commerce sexual　性交。

を忘れて呉れるな、そして師範学校を出でゝ三年にしかならなかった事を附け加えて忘れて呉れるなつまり政府と約束の年限を働かずして去ることは親の迷惑であった、

師範学校　教員の養成を目的にした学校。卒業後の一定期間、教職に就くことを前提に授業料が免除された。